松本市の中心市街地における買物交通行動分析

平成 27 年 2 月　杉浦　彩華

要旨

目的

松本市の中心市街地では，自動車優先の生活からの脱却を目指す次世代型交通まちづくりの一環として，歩行者や自転車を優先とした「歩いて暮らせるまちづくり」に取り組んでいる．しかし，中心市街地への買物交通における自動車の依存度は依然として高いままである．そこで本研究では，中心市街地へ買物に訪れる自動車の代替機能として公共交通の利用を促進させる必要があると考え，中心市街地内の公共交通利用及び郊外から買物に来る人の公共交通利用の促進を目的として分析を行った．

方法

松本市の中心市街地への買物交通行動に焦点を当て，2008 年松本都市圏パーソントリップ調査を用いて買物交通手段選択モデルを構築した．このモデルは時間や費用などのサービスレベルデータと個人属性データ以外にも，自動車規制に対する関心があるかどうかの有無やトリップツアーの有無を考慮したモデルである．このモデルを用いていくつかの政策分析を行い，公共交通の利用を促進する政策の検討を行った．

結論

本研究で構築したモデルは，従来のモデルよりも精度が高かったことから，トリップツアーの有無や自動車規制に対する関心の有無をモデルに取り入れることは有効であるとわかった．このモデルを用いた政策分析では，ロードプライシング政策の方が，公共交通の運賃の値下げや時間を短縮する政策よりもわずかに公共交通の利用を促進させることができた．さらに，ロードプライシング政策よりも，買物の前後に食事・娯楽に誘導する政策と自動車利用を規制することへの関心を高める政策を実施する方が，公共交通の利用を促進させる結果が得られた．今後の課題としては，買物を目的としたサンプル数を増やし，買物を行った商業施設への交通手段を考慮したモデルを用いて政策分析を行うことが必要である．

指導教員　高瀬　達夫　准教授